近代日本庭園史における西洋プロポーション理論の受容について

— 江山正美の庭園構成論に関する研究 (1) —

A Study on the Acceptation of European Proportional Theory in Modern Japanese Garden

— Masami Eyama's Garden Theory of Proportional Thought (1) —

市川 秀和

Hidekazu Ichikawa

福井工業大学助教授・工学博士

Assoc.Prof., Fukui University of Technology, Dr.Eng.

Key Words : プロポーション理論、江山正美、武田五一

Proportional theory, Masami Eyama, Goichi Takeda

1. はじめに—研究の射程—

近代の日本が、異質な西洋世界の文化や技術を受容することで、全く新たな可能性を開くとともに、伝統文化の再構築に取り組んで行く広範な歴史的過程については、庭園史及び造園史においても最重要な研究課題であると言わなければならない。それは公園制度や洋風庭園の導入、近代的風景観の成立、日本庭園文化の再構築、造園学会・庭園協会等の設立など、従来からも既に様々な視点による考察が重ねられてきている。しかしながら近代日本庭園史・造園史の研究は、今後ますます学際的視野の中で進展する必要があると考える。なお筆者も大正期の庭園改善運動から昭和戦中期の国民庭園提唱へ到る動向や、大東亜戦争期の体制下における造園思潮などについて、若干の考察を継続的に進めている註)。

そこで本研究は、近代日本庭園史において西洋文化受容による新動向をめぐる研究射程から、先の田村剛の庭園改善運動に引き続き、江山正美(1906-78)の庭園構成論に着目する。西洋芸術の伝統的なプロポーション理論に初めて取り組んだ江山の着眼点とその研究は、決して看過出来ないであろう。江山は著書『スケープテクチュア』(1977、鹿島出版会 p222 ~ 223)の中で、庭園構成のプロポーション研究へ到達した経緯を以下のように回想している。

プロポーションに関する私の研究は、J.ハンビッジのダイナミック・シンメトリーからはじまる。1932年8月、石川県立松任農学校に奉職した私は、長い模索の後、何かを求めて、1934年の夏京都大学で開催された文部省主催実業学校教員長期実習講習に参加する。ここで私は、いまはなき当時京都大学工学部の教授であった武田五一博士から、ハンビッジのダイナミック・シンメトリーの講義を受ける。一寸の隙もないという龍安寺の配石を追求する手がかりはこれだと直感した私は、その日の午後武田五一博士の宅を訪ね、ダイナミック・シンメトリーに関するC.ブラグドン(1924)の小論を拝借して、夕方の市電に乗った。あの日下宿に帰る市電の中の感激がいまも昨日のことに忘れられない。・・・私のプロポーションに関する研究は、こうしてスタートする。・・・

以上から江山の研究は、昭和9年(1934)に京都大学教授・武田五一の講演を契機として始まったという。故に本稿ではまず、当時の建築界や庭園界における西洋プロポーション理論の受容動向を概観し、江山が研究に着手した当時の状況を考察したい。

1-註)

拙稿(2001)「大正期における田村剛のモダンデザイン思考と庭園改善運動」ランドスケープ研究 vol64,no5

拙稿(2004)「田村剛による実用主義庭園と庭園改善運動」日本庭園学会誌 no12

拙稿(2004)「戦時体制下の造園思潮と田村剛の国民庭園提唱」日本庭園学会関西大会研究発表会資料集

表-1) 近代日本の庭園・建築界における西洋プロポーション理論の受容

	庭 園 界	建 築 界
明治26(1893)年		伊東忠太「法隆寺建築論」
明治33(1900)年		武田五一「建築の格好に就いて」
明治34(1901)年		武田五一、図案学研究のためヨーロッパ留学
明治43(1910)年		武田五一「ギリシア建築に応用されたる幾何学」
大正7(1918)年	田村剛『造園概論』 第三章造園美 第一節(三)形式美	
大正8(1919)年	田村剛『庭園鑑賞法』(12)形式 田村剛『実用主義の庭園』 後編 設計 第三節 意匠 (三)意匠の諸法則 上原敬二『住宅と庭園の設計』 第三 庭園構造の原理 一 形式と内容	武田五一、京都帝国大学建築学科教授となり、 「西洋プロポーション理論」を講ずる
大正12(1923)年		安井武雄「ギリシャ古典芸術に関する一考察」
大正13(1924)年		村田治郎「ギリシア建築に関するハムビッジ律」 ～昭和2年までに、ほか10論文を発表 伊藤正文「建築設計とギリシア建築に於ける対称 及び均勢のハムビッジ氏法則」(翻訳)
大正15(1926)年	上原敬二『増訂 庭園学概要』 第三編 庭園の設計 第一章 第二節 美の形式	村田治郎「ハムビッジ氏の力学的均斉論とその パルテノン研究」
昭和3(1928)年	田村剛『洋風の庭園』十五 庭園の意匠 椎原兵市『庭園の設計と其实例』 五 設計に必要な理論 三 形式美	
昭和4(1929)年	上原敬二『和洋風庭園の作り方』 四 庭園設計に就て・美の形式	
昭和5(1930)年	田村剛『現代庭園の設計』 五 庭園の意匠 (三)美の形式	
昭和7(1932)年	永見健一『理論実践 造園学』 第二章 造形美の構成と其批判 第二節 美の形式	武田五一『建築装飾及意匠の理論並沿革』 第一編 建築構成理論 第二章 形態論 瀧澤真弓「パルテノンとピタゴラス学派」
昭和9(1934)年	西田富三郎『新時代の庭園と住宅』 二 設計の準備 10 庭園設計の前後 江山正美、武田五一の講演を聴講する	
昭和10(1935)年	江山正美「対数的均斉による龍安寺庭園の構成に 就て」	
昭和11(1936)年	江山正美「大仙院庭園構成に関するDynamic Symmetry的研究」 江山正美「作庭家の手法」	
昭和12(1937)年	江山正美「改訂ダイナミック・シンメトリー(予報) による南禅寺方丈庭園の構成に就いて」 江山正美「Phyllotaxis(葉序)に於ける旋生の幾何 学的意義に就いて」	
昭和13(1938)年	江山正美「鎌倉時代に於ける二三の石燈の プロポーションに就いて」	武田五一、死去
昭和14(1939)年	江山正美「プロポーションに関する系統的考察」 江山正美「庭園の構成に関する二三の研究」	
昭和15(1940)年	江山正美「日本庭園に於ける形態学的考察」 江山正美「作庭記の形態学的研究」	
昭和16(1941)年	江山正美「KreisgeometrieとDynamic Symmetryの 統合に就いて」 江山正美「構成理論と霊雲院庭園」	
昭和18(1943)年	斎藤勝雄『庭園新考』 六 庭園の形式(空間構造) *江山正美に言及

ギリシャ神殿と法隆寺の比較

図1) 伊東忠太「法隆寺建築論」(明治26年)

図2-2) 南禅寺山門・側面図

2. 建築界の西洋プロポーション理論受容

江山正美が武田五一(1872-1938)の講演を聴講した昭和9年とは、武田の長年にわたるプロポーション研究の成果を収めた『建築装飾及意匠の理論並沿革』(昭和7年)が出版された直後であり、武田の講演要旨もこの著書からおおよそ察知されるであろう。そしてこの武田によるプロポーション研究の着手とは、学生時代まで遡る。

明治30年に東京帝国大学大学院に進学した武田五一は、茶室意匠の構成を考察した卒業論文「茶室の沿革」をさらに進展させ、西洋プロポーション理論に基づく日本建築の構成研究へと深化させるに到る。その成果が明治33年掲載の講演論文「建築の格好に就いて」であり、「格好」とは「Proportion」に当てた訳語であった。この論文で武田は、西洋プロポーション理論の歴史(黄金分割などの比例構成論)を紹介した上で、日本建築の伝統的な木割と比較するとともに、新しい木割の方法を考案する壮大な視座を提示した。かかる武田論文ほどプロポーションに関して詳細に論じた前例は当時皆無であり、僅かに伊東忠太が「法隆寺建築論」(明治26年)で建物の高さとの幅の比例考察を初歩的に論及したに過ぎない。この武田論文をもって建築界における西洋プロポーション理論の受容と研究が本格的に開始されたと見て間違いあるまい。そして翌明治34年に「図案学」研究のため武田はヨーロッパに留学し、西洋のデザイン理論に触れてくるのである。

図2-1) パルテノン(上)とローマの凱旋門(下)

図2) 武田五一「建築の格好に就いて」(明治33年)

明治36(1903)年に帰国した武田五一は、新設の京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)図案科教授となり、関西へ移住する。この後も武田のプロポーション研究はさらに継続進展し、大正8(1920)年に京都帝国大学建築学科教授となった以後では、武田の後輩や教え子たちによるプロポーション研究へと拡大し、その成果が次々発表され始めた(表-1右)。大正12年の建築家・安井武雄に始まって、続いて東洋建築史家・村田治郎(京都帝大建築学科第一期生、武田の愛弟子)や建築家・伊藤正文、建築理論家・瀧澤真弓など、後の関西建築界の重鎮たちであり、彼らが共通して注目していたのが、当時最新のJ.ハンビッジによるダイナミック・シンメトリー論であつ

た。こうして昭和初期には関西を拠点にして建築界全般にまで広がった。

従って、かかる大正・昭和初期の建築界において西洋プロポーション理論が関西を中心に受容され広まったのを背景に、さらにこの分野での近代日本建築史における記念碑的な集大成とも言える武田五一『建築装飾及意匠の理論並沿革』が昭和7年に出版された。このような状況下に位置づけられる武田の講演に江山正美は出席し、多大な研究課題を得たと考えられるのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

なお表-1右)で明らかなように、昭和以降の建築界でプロポーション研究が急速に消えていくのは、決して理由がないわけではない。昭和2(1927)年、関西の若手建築家を中心に結成された「日本インターナショナル建築会」では、グロピウスやタウトなど外国人会員10名が含まれ、鉄筋コンクリート構造によるモダニズムの建築デザインを推進する活動体であった。モダニズムの若き建築家にとって、西洋の伝統に根ざした黄金比やハンビッジのダイナミック・シンメトリー論は、自由な創造を拘束する硬直した過去の方法論と受け取られ、制作の上で魅力を感じる対象では決して無かったのであろう。つまり西洋プロポーション理論の受容とは、伝統と近代の過渡期を象徴する出来事なのかも知れない。

2- 参考文献・出典)

- 伊東忠太(1893)「法隆寺建築論」建築雑誌(明治26年11月、『伊東忠太著作集第1巻』原書房1982所収)
武田五一(1900)「建築の格好に就いて」建築雑誌(明治33年6月、『建築小論集』高桐書院1946所収)
武田(1932)『建築装飾及意匠の理論並沿革』誠文堂
安井武雄(1923)「ギリシア古典芸術に関する一考察」
 終1号(『新建築』3巻3号1927所収)
村田治郎(1924)「ギリシア建築に関するハムビッジ律」
 満州建築協会雑誌 4の7
伊藤正文(1924)「建築設計とギリシア建築に於ける対
 称及び均勢のハムビッジ氏法則」建築と社会 10月
瀧澤真弓(1932)「パルテノンとピタゴラス学派」
 板垣・堀口編『建築様式論叢』六大館 所収
足立裕司(1985)「武田五一の建築観とその形成期につ
 いて」日本建築学会計画系論文報告集 第354号

3. 庭園界の西洋プロポーション理論受容

以上の経緯を踏まえ、江山正美のプロポーション理論並びに庭園構成論研究が、昭和9年の武田五一の講演を機に始まったとは言え、それまでの江山自身がプロポーションに関する知識を全く持っていなかったのであろうか。言い換えれば、江山を含む当時の日本庭園界での西洋プロポーション理論をめぐる一般的な認識や理解度について確認しておかなくてはならないと考える。

さてそこで先の表-1左)では、大正期から昭和戦前期までに西洋プロポーション理論に触れた庭園の著書・論文を管見の限りにおいて列挙し、さらに次頁の表-2)では江山が武田の講演を聴講した昭和9年以前に発刊された著作に絞り、プロポーションに関する用語の記述内容を簡単にまとめたものである。かかる二つの表によると大正中期頃の造園・庭園界において西洋プロポーション理論は、基本用語の紹介程度のレベルであるが、既に広く知られていたと考えてよかろう。以下、表-2)に基づき、中でも重要な著作について論及する。

プロポーションに関する記述を含む最も早い著作は、大正7年出版の田村剛『造園概論』であろう。この第三章造園美における第一節(三)形式美のなかで、プロポーション理論の基本用語「調和」「釣合」「多様の統一」などが取り上げられている。さらに翌8年には、田村剛『実用主義の庭園』と上原敬二『住宅と庭園の設計』の両書において、基本用語の解説のほか、「比例・黄金律」に関しても論及している(次頁)。田村と上原が西洋プロポーション理論に関する知識を具体的に何から修得したのか明らかではないが、おそらく「建築学」あるいは「美学芸術学」などの講義や著書から知り得たのであろうと思われる。しかしながら田村と上原の両者における「黄金律」の論及は、ほんの紹介程度の内容に過ぎず、この理論の原理にまで深く触れているとは決して言い難い。その後、昭和9年までに出版された著作の中で、田村と上原を超える内容に触れているものは見当たらない。ただ上原敬二『増訂 庭園学概要』には、

表-2) 近代日本庭園史における西洋プロポーション理論の受容 (昭和9年以前)		
	主 な 著 書 (記載ページ、項目)	プロポーションに関する用語・記述
大正7(1918)年	田村剛『造園概論』 p109~110 第三章造園美 第一節(三)形式美	「調和」「対比」「釣合」「漸層」「多様の統一」
大正8(1919)年	田村剛『庭園鑑賞法』 p66~75 (12)形式	「釣合(バランス)」「均斉(シンメトリー)」「対比(コントラスト)」「統調(トーン)」「韻律(リズム)」
	田村剛『実用主義の庭園』 p407~417 後編 設計 第三節 意匠 (三)意匠の諸法則	「反復」「均斉」「釣合」「韻律」「 <u>比例・黄金律</u> 」
	上原敬二『住宅と庭園の設計』 p137~155 第三 庭園構造の原理 一 形式と内容	「主調」「漸層」「反復と韻律」「対称と放射」「釣合」「調和」「対比」「 <u>比例・黄金律</u> 」
大正15(1926)年	上原敬二『増訂 庭園学概要』 p193~202 第三編 庭園の設計 第一章 第二節 美の形式	「単純と複雑」「統調」「漸層」「反復と節奏」「対称と放射」「釣合」「調和」「対比」「 <u>比例・黄金律</u> 」
昭和3(1928)年	田村剛『洋風の庭園』 p151~170 十五 庭園の意匠	「比例 Proportion」「釣合 Balance」「韻律 Rhythm」
	椎原兵市『庭園の設計と其实例』 p33~43 五 設計に必要な理論 三 形式美	「単純」「複雑」「統調」「漸層」「反復」「均斉(対称)」「釣合」「調和と対比」「 <u>比例・黄金律</u> 」
昭和4(1929)年	上原敬二『和洋風庭園の作り方』 p212~221 四 庭園設計に就て・美の形式	「単純と複雑」「統調」「漸層」「反復と節奏」「対称と放射」「釣合」「調和」「対比」「 <u>比例・黄金律</u> 」
昭和5(1930)年	田村剛『現代庭園の設計』 p69~75 五 庭園の意匠 (三)美の形式	「単純」「反復」「韻律」「均斉」「統調」「漸層」「主宰」「調和」「対比」「比例」「釣合」
昭和7(1932)年	永見健一『理論実践 造園学』 p12~16 第二章 造園美の構成と其批判 第二節 美の形式	「反復」「漸層」「対比」「調和」「対称・均斉」「釣合・平衡」「安定」「多様に於ける統一」「 <u>比例・黄金律</u> 」
昭和9(1934)年	西田富三郎『新時代の庭園と住宅』 p168~172 二 設計の準備 10 庭園設計の前後・美学上の理論	「単純」「複雑」「均斉」「対称」「釣合」「調和」「対比」「 <u>比例・黄金律</u> 」

図 六 四 一 第

二つの長さ、又はある二つの面積の比例が、一と一、一と二、一と三、二と三といふ風に、簡単な時には、美はしく見られるのである。これは道の幅とリボン花壇の比例とか、芝生の面積とその中に穿たれた花壇の面積の比とか、短冊形の花壇の長辺と短辺との比とかの間に、見らるる形式である。(第一四六図)

それから短冊等に就てその長辺と短辺とに

$$a : b = b : a + b \quad b > a$$

の関係のあるものが、最も美しいとせられて、その比を黄金律と名づけて、昔から名高いものである。

複雑なものを互いに並べて見て長さも幅も面積も總て簡単な数の割合をして居る時之れを比例と云ふ釣合と調和と相合し此の三つは最も重い形式原理である。(略)

庭園に於ける地割りも一つの比例である。短冊形の飛石でも石柱のイギリス積みと称するものなど皆比例である。其等の距離は常に比例の法則を考へると同時に実用を忘れてはならぬ。

黄金律の説明

昔しから比例の上に黄金律と云ふのがある今甲乙の二つの量がある時其間に左の様な関係式が成立し得る時此の甲乙等の量の関係を黄金律と云ふ、

$$\text{甲} : \text{乙} = \text{乙} : \text{甲乙の和}$$

甲は云ふまでもなく乙より小さい

此れは非常に有名なものであるが有名である程には融通の利かないものである謂はば歴史上の遺物である。数値を示せば、

$$3 : 5 = 5 : 8$$

$$5 : 8 = 8 : 13$$

右のような関係式が成立する此の方法で幾何でも出来る。

①田村剛『実用主義の庭園』より引用 p412-413

*なお、これ以外の著作で黄金律の説明は無い。

②上原敬二『住宅と庭園の設計』より引用 p153-154

*なお、これ以外の著作でも同様の説明を行う。

田村 剛と上原敬二による「比例：黄金律」についての説明

黄金分割による比例構図論を近代において初めて体系的に論じたことで広く知られる、ツァイジング Adolf Zeysing (1855) に言及しているのが唯一注目されるものであろうか。ともかく、表-2) に列挙された著作群を通観して明らかなことは、大正・昭和初期における造園・庭園界では「造形美中心の庭園学」(石川格 p4) が尊重されただけに、西洋プロポーション理論での基本用語が幾つもの著作で一応取り上げられたのであろう。しかし何れの著作でも、詳細な造形原理にまで深く掘り下げた論及にはほど遠く、簡単な紹介程度に過ぎなかったわけである。

そこで、大正7年からの比較的早い時期から、庭園界にも西洋プロポーション理論が徐々に紹介され始めていたのにも関わらず、どうして本格的に取り上げられなかったのでしょうか。建築の芸術性や歴史意匠にも深い関心を持っていた田村剛や上原敬二においてすら、武田五一のような着想を持ち得なかったのだろうか。

このような疑問については、当時の庭園意匠・設計方法にとって西洋プロポーション理論、つまり具体的には「比例・黄金律」による造形構成論とは、「融通の利かない」「歴史上の遺産」(上原敬二)、あるいは「近代合理主義の主張には適用出来ない」(永見健一)という理解のされ方が、ほぼ一般的であって共通した認識として受け取られていたからではなかろうか。大正期の庭園界は「庭園改善運動」が象徴するように、欧米の初期モダニズムからの新しい合理主義的な美意識や自由な造形意匠・創作理念が導入された時期でもあって、西洋古典の造形比例論を物語る「黄金律」とは、日本庭園界の知識人にとって一般教養以上に必要性を感じなかったのであろう。故に僅かに基本用語だけが紹介される程度で済まされていたと思われるのである。

従って、かかる当時の庭園界の状況から、江山正美にとっても昭和9年の武田五一の講演以前は、西洋プロポーション理論のごく簡単な知識程度は持ち合わせていたと思われるが、しかし重要視するまでの認識に

到っていなかったのも、むしろ当然であろう。あるいは逆に、ほとんど重要視していなかっただけに、武田五一が長い研究歴を基に語る西洋プロポーション理論の研究意義と日本建築への適用・有効性は、当時の若き江山正美にとって極めて新鮮な内容であり、実に深い感動をもって聞いていたのではなかろうか。

3- 参考文献・出典)

田村剛(1918)『造園概論』成美堂

同 (1919)『実用主義の庭園』成美堂

上原敬二(1919)『住宅と庭園の設計』高山房

同 (1926)『増訂 庭園学概要』紀元社

永見健一(1932)『理論実践 造園学』養賢堂

石川格(1978)『庭園学概論』誠文堂新光社

A.Zeysing : Aesthetische Forschungen, 1855

4. おわりに一総括と展望一

江山正美による庭園構成論の究明に向けた第一報・本稿では、近代日本の建築・庭園界における西洋プロポーション理論の受容動向を概観するとともに、江山が昭和9年の武田五一の講演を機に本格的な研究に着手するに到った当時の状況を考察した。それを総括すると、以下の3点である。

- (1) 明治33年の武田五一による論考「建築の格好について」を出発点とし、建築界では西洋プロポーション理論の受容と研究が本格化するとともに、大正・昭和初期には武田を含む関西の建築家を中心に広まっていた。なお昭和7年には武田の研究を集大成した著作が出版された。
- (2) 庭園界での西洋プロポーション理論受容は、大正7年出版の田村剛『造園概論』から徐々に確認されるが、僅かに基本用語の解説程度に留まり、積極的に探究・評価されることはなかった。
- (3) 江山正美においても西洋プロポーション理論を評価するには到っていなかったが、それだけに昭和9年の武田の講演からその重大性を再認識し、研究着手の意義と可能性を実感したと考える。

従って次稿では、江山正美の庭園構成論を具体的に解明するために、J.ハンビッジや武田五一、村田治郎等と比較して進める。